

2005年3月16日

三井不動産株式会社
代表取締役社長 岩 沙 弘 道 殿

社団法人 日本建築学会
会 長 秋 山 宏

三信ビルディングの保存に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より、本会の活動につきましては、多大なご協力を賜り、厚くお礼を申し上げます。

さて、貴下におかれましては三信ビルディングの取り壊しをご検討されておられる旨、聞き及んでおります。

本会においては、近代を代表する極めて重要な歴史的建造物としてこの建物を位置づけております。本会では以前より、我が国における明治・大正・昭和戦前の近代建築の調査研究に着手し、その成果を『日本近代建築総覧』（1980年、技報堂出版）として刊行し、そのなかでも特に重要な建築作品については歴史的・文化遺産としての価値とその保存の意義を所有者にお伝えすべく、努力して参りましたが、貴下所有の「三信ビルディング」がその対象であることはすでにご承知のことと存じます。

この建物は、別紙「見解」で示します通り、明治・大正・昭和初期において数々の優れたオフィスビルを手掛けた横河工務所が設計したもので、関東大震災の体験から我が国で開発された重要な耐震構造である鉄骨鉄筋コンクリート造を取り入れた、当時としては最先端の事務所建築でした。外壁最上部の放物線アーチと曲面に突出した壁面などにやや表現主義的な影響のみえる意匠を、明快な三層構成のファサードに巧みにまとめ上げられています。また、建物の低層部を長手方向に貫く二層吹き抜けのアーケードは、ヨーロッパの歴史的地区などにみられるパッサージュを思わせる、魅力的で独特の公共的都市空間を作り上げております。このように、この建物は我が国の近代建築の歴史のなかでも、まさにその黄金時代であった昭和初期を代表する極めて優れた建築作品であると考えられます。

貴下におかれましては、この貴重な建物の文化的意義と歴史的価値についてあらためてご理解いただき、このかけがえのない文化遺産が永く後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。

なお、本会はこの建物の保存に関して、できうる限り協力させていただく所存であることを申し添えます。

敬具

2005年3月16日

三信ビルディングについての見解

社団法人 日本建築学会
建築歴史・意匠委員会
委員長 陣内 秀信

東京・日比谷公園に面して立つ(東京都千代田区有楽町一丁目所在)三信ビルディングは、横河工務所(担当:松井貴太郎)の設計、大林組の施工により、昭和5年(1930年)に竣工した貸店舗・貸事務所用の商業建築である。その建築作品としての価値は、以下のように要約することができる。

1. 商業建築としての価値

地上8階、地下2階、塔屋1階の三信ビルディングには、当時としては最先端の鉄骨鉄筋コンクリート構造が採用されている。この構造形式は、当時、関東大震災による苦い体験を踏まえて、欧米流の構造方式をもとに我が国で開発された、いわゆる「耐震構造」であった。これは、震災直前に竣工した日本興業銀行(設計:内藤多仲)がほとんど被害をうけなかったことが注目され、その後の震災復興のなかで、例えば、大正14年(1925年)竣工の東京大学安田講堂(設計:岸田日出刀)など、都心に建設された多くの重要な建物に採用されていった。三信ビルディングもそうした代表的な事例のひとつである。

また、この建物の設計を手掛けたのは、明治・大正・昭和戦前において数々の優れたオフィスビルを生み出した横河工務所で、直接設計を担当したのが、同設計事務所の建築家・松井貴太郎であった。松井は明治36年、東京帝国大学建築学科の卒業後、横河工務所に入り、そこで東京や大阪を中心に多くの建築作品を遺した。その主な建築作品として、三井銀行大阪支店(1916年)、東京銀行集会所(1914年)、日本工業倶楽部(1920年)、三井物産大阪支店貸事務所(1920年)、三越呉服店高松支店(1931年)などが知られる。しかし、彼の建築作品の多くはすでにとり壊され、三信ビルディング以前の作品で現在残されているのは、東京銀行集会所(現東京銀行協会)と日本工業倶楽部だけで、いずれも当初の建築作品としての「質」を大きく失ってしまっている。そうしたなかであって、三信ビルディングは、今もなお当初の姿をほぼ完全な形で維持しているという意味で極めて貴重であり、さらには46歳という、まさに建築家として熟成した時期にあった松井が、その優れた手腕を存分に発揮した名品として位置づけることができる。

東西に細長い敷地にたつこの建築の外観は明快な三層構成をとり、通りに面した西と南の立面の中央部において外壁最上部の放物線アーチや頂部を強調するような意匠、曲面状に突出した壁面などに当時の「表現主義」的な影響がみられる。また、外観に独特なリズム感を与えている開口部にも注目できる。中層部では縦長矩形の三連窓が規則的に並び、それを挟んで下層および上層部では隅部の角を取った柔らく大きな窓が配されている。こうした表現は、従来の古典主義的な様式から近代モダニズムへ移行する時期にあって、近代日本の商業

建築にふさわしい建築意匠を模索したものとして位置づけることができ、建築歴史の展開過程をみるうえで重要な価値を有している。

1階・2階の吹き抜けのアーケードは、三信ビルディングにおける最大の建築的な魅力であり、その空間構成とデザインの質は高く評価できる。ヴォールト天井が細長く連続し、その両側に店舗商店が並ぶ建築構成は、ヨーロッパ各地の歴史的街区にみることができる「パサージュ」を髣髴させるものである。これは中世以降、商業的都市空間を高度に発達させていたイスラーム文化圏におけるスークやバーザールにも通じるもので、ひとつの屋内化された町並みとして、魅力的で独特の都市公共空間を再現している。アーケードを構成する低い穏やかなアーチのイントラドス（下面）を飾る星型の装飾帯、半円形のエレベーターホールや階段室にみられる意匠など、独創的で豊かなデザインは秀逸である。

2．地域の文化遺産としての価値

言うまでもなく、三信ビルディングの所在する丸の内・日比谷地区は、明治以降、東京駅を中心に近代日本の商業中枢として栄えた地区であり、事務所ビルのほか、銀行・ホテルなど日本を代表する近代建築が立ち並んでいた。しかし、そうした多くの貴重な都市文化遺産は若干の例外を除き、次々に失われてしまった。三信ビルディングは、日本を代表する都市公園である日比谷公園に面し、同公園内の日比谷公会堂、市政資料館などとともに日比谷地区の都市景観を構成する極めて重要な意味をもつ歴史的建造物である。

わが国の近代建築の歴史においても、三信ビルディングが建設された昭和初期は、まさにその黄金時代であったといって過言でない。明治期に西欧諸国から導入された建築の意匠と技術はこの時期ほぼ完全に習得され、また産業など国力もヨーロッパ列強に追いつこうとしていた。また、関東大震災という建築・都市にとっては厳しい試練をうけ、そこから耐震性という日本固有の建築技術的な進化もみられた。その後、昭和二桁台ともなると、徐々に戦時体制化へと日本全体が傾き、それに伴って建築の質も悪化していく。三信ビルディングは我が国の近代建築史におけるまさに頂点の時代を証言する建築であり、かつてはそうした時代の建築遺産が数多く立ち並んでいた同地区にあって、その希少価値こそが重要である。